ありて宇宙的同情を以て人類を擔ふて度するに衆生の苦を我苦とし人を度せずば我も成佛せじとの情操と實行となり釋尊の未だ正覺を得たまはざりし時またキリスト。マホメットの類孔子ソクラテースの如き善導達磨の類吾國の空海源空等の聖者は悉く菩薩とす。すべて心靈更生して永恆の生命となりて人類を誘導する勇健なる仁人はみな之に屬す

佛陀　前の菩薩の因位圓かに果成を佛陀と名つく法身報身應身の三身あり此世に出て釋尊として人格の身を以て人類を教化度脫し玉ひしは應身と云ひ最高等の清き處に在して相好圓滿の身光明遍く十方を照して一切の人類を攝取し靈化し玉ふを報身と云ひ天地萬物の實體として一大精神態にして萬物を現出する本源なるは法身である佛陀は人類に對しては人の身なれども內面は宇宙の內面と一體に在せり　己上四聖は聖靈態精神にして卽靈格なり

勸結　一心の發現たる十界の中にして無明なるものは六凡にして冥々として流轉し心靈覺醒たるものは聖者にして宇宙心と冥合して涅槃界に安立し前三聖は覺醒たるも未だ圓滿ではない獨り佛陀のみ全く宇宙と同一體にして一方には極樂に安住してまた一面は分身を以て世界に出て度脫の作用をなすのである。

宗教の眞理は何の點にあるやと云は各自の精神と其本源なる宇宙精神との調和するにあり自己が小天地の小我とすれば宇宙は大我である此大我と小我が融合して大我の目的を我目的として眞理の終局に進むべき力行をなすが宗教の目的である其大我の眞面目を悟りしは卽ち教祖釋尊である否悟りしのみにあらで全く大我の化現である。

釋尊は其大我を「アミダ」と名くと曰へり譯すれば無量の光と永恆の壽の義卽ち宇宙の眞體にしてまた一切心靈を開發し靈化するの靈能なり問ふ何なる法を以て大我小我の調和を得べきや答て佛教に其方法多しと雖ども最も簡易にして完全に調和をうるは佛陀三昧なり佛陀三昧とは大我なるアミダの聖名によりて其聖旨の我に現はれんことを祈りなば早晩如來の靈應が自己の心靈に感じこの一點の靈光に由て心靈の覺醒と

なる心靈開發すれば自己の心は全く如來の天眞自性の中なることを悟る進んでは如來の內容なる金銀摩尼寶珠の宮殿七寶の莊嚴に最とも威嚴魏々たる相好の如來に神聖正義智慧慈悲等の萬德を以て嚴臨玉ふことを啓示さる爰に至て始て完全たる宗教の關係を成したりと云ひます。

かゝる眞理を得てよりは宇宙の心を我心とし宇宙の眞理に參與りて得たる眞理を實踐躬行するが宗教の本旨にて而かも宇宙の目的に加はりたるものであります。

大正十三年二月二十三日印刷同月二十五日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢　年十二冊貳圓

編輯兼發行人　山崎辨成

印刷人　東京市小石川區茗荷谷町三十七番地　土屋六郎

發行所　東京市小石川區水道端二丁目四十四番地　ミオヤのひかり社

振替東京四九三四八番

自覺の曙光

目次

眞實の自己と本分
絶對の大靈
三身と二界
靈性の形式
靈性の內容

序

仰ぎ惟みれば、宇宙の洪々邈々たる、横に空間を超へ竪に時間を絶す。無邊の邊を極らんと欲すれば識量亡し、無際の際を量らんと欲すれば思想絶せん。吾人が瞻仰すべき自然の現象界にも、天に日月星辰あり其軌を逸せずして循環し、地に森羅萬象あり四時行はれ萬物成る。若其本原なる、諸法の原則たる、萬物の原動たる實證に於ては實に不可思議の不可思議なるものなり。靈妙不測の實體を凭麽に名けて其理を詮表すべきぞ。名の名くべきなし。強ひて名けて、絶對の大靈と稱せん。孔子は之を天道と呼び、基督は天の父と號ぶ。佛敎にて眞如實相と名け、亦は妙法と云ひ、或は盧毘舍那と稱し、今は法身無量光と號す。其の觀念の淺深等しからずと雖も歸する處は卽ち同體の別號に外ならず。俯して考ふれば、吾人渺たる惑星に此身を寄する、宇宙の無窮に對するときは大虛の一浮塵に過ぎず。然りと雖も奇なる哉、一塵大千の經卷を納むる靈性の在るありて、大靈の寵兒たる分を失はず。若し此靈性の開くるあらば、大靈と合一し、虛徹圓明に照すこと極りなく、無限の靈力を力とし、大靈の一員たる自己の本務を果すことを得む。

吾佛陀に仙が世に出興し玉ふ所以は、一大事の因緣たる衆生の知見を開示し佛の正道を行せしめん爲なりと。卽ち釋迦敎祖が地上に生れたる目的は、人々の本然なる靈性を開き、自我實現的に行爲し本分を竭さしむるにあり。

頃者、求道仁士の請により、佛敎の要領を講說す。說を分ちて卽ち五節とす。初に如何なる自己が眞の自己なる乎を示し、次に自己の根柢は絶對の大靈なることを論じ、次に大靈が三身を以て衆生を開發し攝化し玉ふことを明し、次に衆生靈性の形式を開發すれば、法身と一體觀なることを說き、終に靈性內容の心相と靈我實現に說を以て結了す。歸する所、自覺したる靈我を實現的に行爲し、人生を完からしむるを旨趣と爲す。講已るや、尙此講本を刊行して同志の士に頒たんと欲すと。予其好意に感じて敢て不文を顧みず、訂正增補し自覺の曙光と題して其求に應ず。若し見聞の緣、自覺の資と爲ることあらば、實に是れ幸なりと爾云ふ。

大正二年四月中浣

折尾正願精舍に於て

佛陀禪那辨榮

自覺の曙光

眞實の自己と本分

佛敎は、人の本然本有の靈性を開發し眞實の靈我實現的に行爲し、現世を通じて永遠の靈界に進趣するを目的とす。卽ち自己の深奥なる靈我を覺醒し、また他にも覺らしめ、圓滿に自己を完成し、靈我の理想を實現的に行爲すべき敎を佛敎と爲す。佛敎が人の精神の知力と感情と意志との三面に對する功能の格言を標せば、

一轉迷開悟　人の知力を開示し自己と及び人生の眞理を覺らしむ

二拔苦與樂　感情を融化し、人生の歡喜平和等の靈福を感ぜしむ

三廢惡進善　意志を靈化し人格を高等にし天分を果さしむ

將に眞門を扣きて自覺の道を求めんと欲せば、各自が現在抱持する處の人生目的觀につきて這個の問題を自問せよ。一、人は何の爲に生れ來りしや。二、人は何の爲に活けるや。三、人生の終局目的は那邊に在るやの自答を試み給へ。此れ個の解答は現在

自己の人格を計るの秤なればなり。人生目的觀の淺劣なる者は人格の劣等なるは論を俟たざらむ　次に人生の目的を自覺せんには其階梯たる他の生活と比較して以て人類の位置を知るの要あらむ、概して地上に生活せるものを分ちて三階とす。一、植物生活。二、動物生活。三、精神生活。斯等の生物には通じて二の職分あり。一に營養、二に生殖。前者は自己保存の爲め後者は種族保存を目的とす。人類も亦生物なり。他の生物と共通せる二の職分を營まざる可かざるは無論なれども、唯、形體、長大のみを以て誇とせば、長松大杉の前には屈伏せざるべからず。種族保存の力は植物には及ぶべからず。彼等は數百年の生命を保ち數千年の種族を增殖す。次に高等動物は日に數十斤の肉を噉ひ其體力の强きこと人類よりは遙かに優れたるものあり。今人類は精神生活を以て萬物の靈長と自ら誇るにあらずや。若し人にして唯生理的の職分のみを以て目的と爲す如くならば靈長の意義那邊にか存すべき。人類生存の目的に進んで特長たる精神生活の中に深重なる意義の存在せることを發見せざるべからず。就ては人類も亦動物卽ち精神的動物なり。他の高等動物との共通性と獨り人類の特有性とあり是れ人の內的生活の宮室たる頭腦を三階に分ちて共通と特有との性あることを知り、各部に亘りて完全に發展せんことを要する所以なり。

佛敎には人の精神を四階に分つ。今は便宜上性相學の三性に由る。面部の眼より下部を天性と云ふ。是れ五管の官能感覺作用等は他の動物と共通して生理上缺くべからざる部として有するものなり。中階を理性と曰ふ。眼より額の中位に至る理性又は人性と曰ふ。是れは唯々人類特有の性なり。人は此の理性ありて世界萬差の事理を解すべし。科學に研究すべき自然の萬法も此の理性にして能く認識することを得、また實行上の道德も法律も此理性ありて行はる。心理上に判斷し辨別し觀察し思考する等もまた是れ理性の力なり。三に上階を靈樞性と名づく。人は斯靈性ありて超絕界の不可思議の靈物卽ち神と交感することを得。若し此靈性開く時は絕對の大靈と合明し永恒の生命に入ることを得。靈性は無限の靈に接觸する窓にて不思義の力を授かる手なり。靈の眼なくば神光を知見するに由なく靈性開けて初めて眞に天を覺ることを得む。

諸〳〵の資者よ。各自は斯三性の中何の位にか自己を置むるや。理性未だ顯動せざる人

は、唯々天性なる生理機制の上に我を執し、營養と生殖を以て是れ人生の目的と想はんか。彼等は常に肉慾に飢る我慾に渴き黃金の前には容易く人格を賣んに吝ならざらん。また此等の類は天性を自己と爲すが故に、天然の氣質も性癖も自ら矯正するの力なく、內に肉我の慾滿ち外六塵に縛せられて　終生肉我の奴隷たること免れ難き、實に憐むべきの輩なり。

次に自己を理性に認る者は、理性的自覺の我なれば、認識には自爲界の事理を學理的にも覺知することを得、實踐には高等なる理性我が自己の肉我の慾を抑制することを得、自己を訓練し矯正し道德的行爲を爲す。人格を具へ常識に富み正義恭敬を以て己を持し仁慈同情を以て他に及ぼす如き、寔に文化の外面は此等の人に依て實現すべし。

次に靈性に我を認むる者は最高等の我なり。此靈我覺醒して眞實の自己を識るべし。此自己は大靈を父と呼ぶの我なり。宇宙を通じて我有と爲すの我なり。無盡の寶藏を開きて恣まゝに爲すことを得る我なり。一切の衆生を同胞と爲すの我なり。此自己卽ち最深の我なり。靈我開くれば天地に充ち滿てる靈氣を呼吸し、大靈の溫かなる慈悲の風は徐ろに流れ、靈氣感ずる處に心靈の花は開かむ。甘露の潤ひに信念の色香に彌彌馥はしく、慰安と滿足とは內に充ちぬ。此に於てか拔苦與樂の功果は現はれむ。神聖なる威力は我等が靈性に嚴臨して、至誠なれ、眞實なれ、正義なれ、そが進行する處に至善の國は開れむと示さる。大靈の警告は靈性にして聞くことを得べし。卽ち汝を害する賊は外界にあらず、汝が肉と我とに在りて汝が靈寶を奪ひ去らんとす。至心に努力せよ汝が心の奧に賦せらる靈性實現的に。我は父なり汝が爲めに宇宙を悉とく與ふこと吝とせざるも汝專精に努力して靈我開くにあらずんば奈何せん。一心に奮鬪せよ。汝が心を橫領せんとする虛僞、懈怠、傲慢等の賊を征らげん爲に、如何なる艱難をも大靈の力を力として勇猛に精進せよ。安穩なる樂土は開拓せん。汝が身心は肉と我との慾を貪らんが爲めの器にあらず。靈我の理想を實現せんが爲に與へたる具なり。殺すこと勿れ汝が靈格を。倫む勿れ努力の光陰を。婬する勿れ天魔の使と。醉ふ勿れ肉と我とに。欺く勿れ己の良心を。此五戒は大靈より靈我に授けらるる警告の聲なり。

若し靈我實現せん時は其慾望　隨つて努力する處、悉く廢惡進善の功果とならん。

宇宙の大靈

宗教は宇宙に絶對的偉大の力ある靈格の存在を信認し、之に歸依信賴して救度を求むるものなり。意識幼き天性の人は現世界は我に幸福を與ふるものと想ふに、相待に規定せらるゝ世の掟は、因緣によりて生じ因緣によりて滅し生滅變化極りなく無常遷流休むことなし。斯る世界は畢竟依屬と爲すべきにあらず。されども此轉變常なき世界にも其根柢には絶對の實體なかるべからず。其絶對の實體を認信し之に依屬し而して始めて永恒の生命と常住の平和を得らるべし。其實體とは絶對の大靈即ち如來是なり此大靈は萬有の宗教なり。

宗教を研究せんには先づ宗の義を領會すべし。宗に三義あり。獨尊、統攝、歸趣是なり。是れ宇宙萬有の根柢たり中心たり終局なり。獨尊とは絶對無比の尊き物是れ一切萬法の大本萬物を因て以て生ずる所。萬物は所生の子、大靈は能生の父なり。唐の宗密禪師が天地人の本源を究めて原人論を著す。其意に曰く、儒道云く人の本は近くは乃祖乃父遠くは即ち一大元氣自然の道法なりと。儒道の二教は元氣を體とし自然を用とす。彼教は人の形氣の本源を原ねしも未だ內性精神の元因を究めず。佛教は內的心靈の根柢を明らむ。佛教に亦淺深あり。淺きは人の本因は業の勢力なりと說き、次に進すで阿賴耶を根元と曰ひ深きは即ち如來藏性を以て萬有の大本と爲す。萬物之に因て生成す。若し此兩教を會せば、前の二教は外面より究めて一大元氣を大本と說き、佛教は內面より原ねて如來藏性を本源とす。爾しながら此二教は一體の內外二面觀なり。是即ち絶對の大靈を以て萬有の根柢とす。

統攝。宇宙には萬有を統べて攝理する處の理法なかる可らず。何となれば人の身體の中に於て一毫も數多の分子を統制して自治體を成し、指其他は手に統制せられ、身體は四支等を統制し、一家は若干の身を統制し、一村一郡より一國家、進んでは地球は萬國を統制し太陽は諸〻の星辰を統制し小は大に統制せられ、此如く展轉向大して最終一切の萬有の統攝者なかる可らずとすれば、即ち絶對の大靈是也、

歸趣。萬有が進化の終局に歸趣する處、萬有は本絶對の大靈より開展せられ、極大より展轉して地上の極小の生物を發生し、極小が進化の目的ありと爲ば何れか歸趣すべき所。地球の生物進化の行程を考ふるも、植物の進化は動物の發現を目的とし、動物の進化は精神生活の人類を目的とし、人類が天性の進化は理性を現出し、理性の向上は靈樞性を發見し、靈性開發すれば絶對の大靈と合明し大靈の目的なる無上の大道に參はり、靈我の天分を果して以て大靈に歸趣するものとす。絶對の實體本質宇宙の本體に就ては、古來哲學上物心二元論あり、唯心論あり、唯物論あり。今は宇宙の實體は物心不二一體にして、外面よりは物質と見、內面よりは心質と觀るものとす。

宇宙本體は、時間を超え、空間を超え、萬有中に存在する絶對心靈態なりとす。之を佛教にて總該萬有心と云ひ、即ち一切萬有を該維する心靈の義。又は如來藏心とも云ひ物心不二の毘盧舍那とも云ふ。即ち絶對の大靈を種々に名づけたるに外ならず。

又自然科學者は、自然界の物質の根柢にエーテルを立つ。然るにエーテルなるものは心質とも物質とも辨じ難し。物質には質礙あり。エーテルには質礙なきが如し。故にエーテルが今一歩進んで深く其根柢を究むれば一大心靈てふ活物し見做さゞるべからず。何となれば人は精神ありて活動し、又物質分子を聚めて此身を維持することを得宇宙の靈活及び萬物統攝にも、エーテルの根柢に絶體の大靈を立つるにあらざれば、萬物の生成統攝の理を說明すること能はざるべし。

如來三身

前に、宇宙萬有の根底と中心と及び極致とは絶對の大靈なりと論じぬ。大靈即ち神なり。高等なる宗教の神にて今は如來と云ふ。如來は絶體にて一體なれども萬有に對して三身と爲す。一に法身。二に報身。三に應身なり。法身は毘盧舍那とも如來藏心とも云ふ即ち絶對の大靈なり。法は一切萬法の一大原則にて、大にして天體星宿の循環より、小にして動植物界の生活の理に至る迄一として此法則にかゝざるなし。身とは宇宙全體に名づく。物心不二の故に毘盧舍那と名づけ、一如の體なれども內に無邊の性を藏す。故に如來藏性と云ふ。天地萬有悉く此藏性の發現ならざるはなし。法

身に一切知一切能の兩德を具す。萬物を開發し生成するの秩序を整ふ理性を一切知と曰ひ、萬物を生活々動せしむる勢力を一切能と云ふ。

法身の大靈より產出せられたる個々は皆其分子なり。太陽も地球も衆生も、悉く、法身なり。佛敎は汎神敎なれば一切衆生も皆神性を具よ。全體法身が萬有を產み出すと云ふも直ちに生すと云ふにあらず。一切生物も悉く小法身の故に天則に則りて能生の能を有す。卽ち微少なる動植物も生殖の用あるを以て知るべし。然らば卽ち個々は皆是れ小造物なり。然れども一大法身の則に依らざれば其子を產む能はず。衆生は小造化たると共に佛と成り得らるゝ性能を具す。法身より發展せられたる衆生を終局目的の心靈界に攝取して無上覺を得せしむる權能は報身佛とす。

報身佛は絕對の大靈より靈的方面に顯現したる靈妙不可思議の身なり。佛身に無量の相好を具へ、神威極りなく、無盡の光明を照し、金銀摩尼寶石を以て莊嚴せる靈妙に在して、神聖正義恩寵等の聖德圓かに備へ、心光遍く法界を照して、歸命信念の衆生を攝して涅槃常樂の靈界に入らしむる如來なり。

應化身。現世界の衆生を敎化し、靈的生命に歸入せしめんが爲めに出現したる佛陀釋尊是なり。佛陀は報身佛より分れて、此土の衆生に應同したる身を現ず故に應身と曰ふ。生涯五十年の奮鬪的靈的活動は實に完全なる行爲を以て模範を示し玉ふ。

自然界と心靈界

宇宙は絕對の大靈界なれども、衆生の見に對して二方面あり、一面を自然界と呼び他面を心靈界と稱す。

自然界は吾人が感覺し經驗しつゝある現世界なり。天に日月星辰運行し地に一切の生物生存す。自然の法則ありて四時行はれ萬物成る。自然の法は相待に規定せられ、因緣に相成り因果に生滅す。一切生物界が生存の競爭は古今に通じ優勝劣敗の法を改めず。如何なる土地にも適者生存の掟は行はる。古人の言ふ生者必滅會者定離は今尙依然たり。老病死苦は尊卑を撰ばず、無常苦空は賢愚を論せず然るに天性の輩は世を快樂の舞臺と想ひ、朝に開きし榮耀の花は夕の嵐に散りゆくを覺らず。自然は酷

なるか、將また愛なるか、當に綻んとする、窈窕たる花顏を未だ開くを待ずして散らし、彼が前には王公尊貴の人權もまた有ることなし、人力夫れ自然を如何せん。

理性既に開發したる或學者の爲には、自然界の萬象は悉く研究の材料ならざるはなし。或は雷鳴に緣りて電氣を發明し、檣子の落つるを見て地球の引力を覺る等、自然萬物の起伏隱顯何かは理學の對象ならざらん。又一轉して、靈性開發を期せん人の爲には、現世界は自己を鍛錬すべき修行の道場にして、自然と人爲との迫害は還つて自己を研くの利器と爲す。一切の誘惑と妨害とは尅克忍耐の試驗具と爲る。又若し現世界を以て、より以上の目的に進むべき階梯の修業士と觀する時は、萬善萬德を修すべき諸〻の器具完備するにあらずや。經に憍慢と弊と懈怠とは此法を信じ難しと。實に不退の精進勇猛なる健士にして初めて最終の勝利を得べし。

若し人勇猛精進百尺竿頭に一歩を進めて靈性現前する時は、無明の夢醒めて旭日晃耀として乾坤を照し、身は此處に在て淸淨界の人とならん。是を餘有涅槃とす、卽ち形を有しながら神は極樂に栖みあそぶの謂なり。

心靈界諸〻の聖者の安住する處、靈性開發せる人は理想に於て靈界に神を栖ましむ。而して後全く命終りし時は前の理想が現實と爲るに至る。靈界を極樂、又は寂光淨土、涅槃界、蓮華藏界等の麗しき名を以て稱せらる。超然敎には、靈界は、現宇宙を超えたる天上に在りと云ひ、又は十萬億の彼岸に存すと爲、蓋し未だ證得せざる機類に對しての說なり。自然界は肉眼の所見にて心靈界は心眼の對象なり。佛眼開く時は去此不遠、此處に於て淸淨界を觀ることを得む。世人淨土の存在を疑ふ者、自己の經驗を以て結對眞實と執し自己の實驗し得ざるが故に其實在を疑ふならむ。然れども未だ覺らざりき現在實有と想ふ經驗は無明の夢の所見なるを。自己また夢なることを識らず。靈界は靈醒し而して後に實觀せらるべし。譬ば夢中の所見の物は醒る時は還て無が如し。若し淨土にして、凡夫無明の夢中に實見し得るものとすれば淨土も亦夢ならずや。若し靈性一たび覺め來つて觀せば淸淨の靈界は忽ち現前せん。ブラトー曰く凡夫の畫とする處は聖人の夜にて聖人の畫とする處は凡夫の夜なりと。釋迦曰く我れ三界の如くに三界を見ず、如實に三界の相を知見すと。釋迦は五眼具さに備は

りて、若し肉眼を用うれば吾人と同じく娑婆を見又佛眼を以ては眺ち淨界を觀玉ふ。法華經に衆生劫盡て大火に燒かるゝと見る時も、我此土は安隱にして天人常に充滿し種々の寶を以て莊嚴す等。大火に燒かるゝ方面は自然にて、常住安隱なるは靈界の方なり。若し人肉眼なかりせば、自然界の美を見ること能はざる如く、佛眼未だ開かざる人、爭でか靈界の美妙を知見することを得む。靈界は眞善美の極致、カントが謂ゆる最高福と最高德との一致する處、靈界は報佛を主として諸の聖者 安住する勝妙の方面なり。

靈性形式方面

前に、如來は宇宙の大靈にして、三身を以て衆生を攝取し給ふ客體なりと明しぬ。法身は人の理性と合一し、報應二身に人の感性と感應す。前者 形式動機にて後者は內容勸機なり、前者を理の念佛三昧とし後者を事の念佛三昧とす。翔の念佛三昧とは自己の靈性と如來の大靈と一體なるの義、南無阿彌陀佛卽ち是れなり。阿彌陀とは梵語、此處に無量と譯す。是れ如來の本體絕對無限の義卽大靈なり。亦無量壽。無量光とも號することは如來は時間に限量なく三世に貫徹して永恆存在し、空間に邊際なく靈光偏く照す靈性なることを意味す。凡そ空間に有限なる者は時間にも亦有限なり。太陽と云ひ地球と曰ひ又は我身と云ひ、何れも大小あれども、空間に有限の故に時間的にもまた有限なり、宇宙の一切現象の中、無限なるもの一もなし。絕對無限なる者は宇宙全體の大靈なり。大靈は無限の生命、無量の光明なり。太陽も地球も衆生の生命も絕對無限の一分を得て以て生命として存在す。太陽の光もまた無限の靈力より受け得て以て光輝を發す。吾人の心も亦無限の光より稟け得て以て智力となす。自己の生命亦然り。此理を覺らざる者を迷と云ふ。

南無とは此處に歸命と譯す、卽ち自己の全體を大靈に投歸沒入するの義なり。絕對の大靈を大我とすれば自己は卽ち小我なり、小我の全部を無限の大我に投歸し一體となる。また自己の根柢は絕對大靈なれば、自己の靈性開發すれば一體無二と觀じらるべし。是れ自ら造りて然るに非ず本然の自性なり。人々各自の靈性を開發し本然の無量

光を發顯すべし。若し靈性開發して大靈と合する時は、諸の障礙なく靈光洞然として十方に照耀す、之を盡十方無礙光と云ふ。

宋の蘇東坡居士讃佛偈、能く此義を得たり、偈に曰く

佛以二大圓覺一　充二滿十方界一　出二沒生死中一
云何以二一念一　得二往生淨土一　我以二顚倒想一
我造二無始業一　一念既有餘
已從二一念一生　還從二一念一滅　生滅々盡處
如二風中鼓一レ橐　雖レ有二大聖智一　亦不レ能二分別一
如二水投二海中一　便我與レ佛同
願我先父母　及一切衆生　在所爲二西方一　所遇皆極樂
人々無量壽　無去亦無來

諸賢宜しく此偈に參じ、自己の靈性と無限の靈との一體觀を了得し給へ、是便ち理の念佛なり。

楞嚴經に、自己の靈性開發する時は、絕對の大靈、如來藏心と一體なることを自覺すべきを示し給ふ。而して靈性の光を以て自己罪惡の伏在する處を發見し、其煩惱の賊を捕へて以て討伐せよと敎へ給へり。衆生罪惡の賊は天性肉我に眠伏し機會だにあらば顯動して己が欲を恣にせんとす。肉我は闇黑にして煩惱賊の潛伏する處、若し靈性の光一たび發射する時は彼降伏せざるを得ず。楞嚴經に其の消息を洩らされたり。其意に曰く、佛徒阿難は甚だ美貌なりき。或時婬女マトカの咒術に惑はされて已に犯戒に及ばんとするを、祇園寺に在ます佛世尊天眼遙に之を視、光明其室を照し玉へば、阿難、驚覺、慚愧に耐へず直ちに佛前に歸り來りて其非を悔ひて卽ち救を求む。佛曰く阿難よ汝眼の爲に惑はされて業を結び生死に沈淪す。全體、眼に色視、耳に聲を聞く等の外界の誘惑に捕へらるゝは、眼と心との所在を明かにせざるが故なり。汝の物を觀る心の本體は何に在るぞと徵問して、感覺の淵源を究めしめしに、阿難竟に感覺の本源なる心性を覺ること能はず。佛曰く汝等唯六塵分別の影像を認め、全く自己の本心と謂ふは、寔に是顚倒の至りなり。凡夫は迷ひて眼耳等の爲に煩惱を發す。故に六根六識を罪惡の源と謂へり。蓋し自己の誤用して惡と爲すものゝ、本來眼耳鼻舌身意の六根も、色聲香味觸法の六塵も、十二入十八界も、此身心の本たる地水火

風空識の大性も、其本源は如來藏妙眞如性にして周偏法界の靈體なり。そが業に循ひ緣に從ひて發現せる世界萬物なり。故に本來汝等が自己の本心眞如の靈性は、內に非ず外に非ず十方に周偏し三世に虛徹し靈明圓通して法界に等し。而て十方無量の刹土は悉く大心中の塵々なり。其心を以て此身心を見る時は大海の一漚の如しと觀じらるべきことを示し玉へり。

寔に自己の靈性開發する時は本體の大靈と一體觀に入り、靈性の形式方面を會得し法身の本體と合すべし。

靈性內容動機

大靈の本體たる法身と相應ずる人の精神は形式動機にて、報應二身との關係を爲すは人の感性にて卽ち是を內容動機とす。

報身は、心靈界の太陽にして、慈智化の光明遍ねく十方を照し、歸命信念の衆生を攝取し玉ひ、靈應身は信念の衆生に影向し常隨して離れず、衆生何に心を用ゝてか如來の心光と親密なる關係を爲すべきぞ。聖經に十方衆生至心に信樂して我國に生せんと欲し乃至十念せんに若し生せずは正覺を取らじと。是れ報身佛が衆生に對して此心念を以て我を依賴せよとの聖意なり。卽ち至心に信愛欲の三心を具へて、我を依賴し、念佛せば、必ず攝取すべしとの義なり。

信は、眞實に如來卽ち大靈の實在と實力とによりて、自己の救靈せらるゝことを信ずるなり。信に三位あり、一、仰信。二、解信。三、證信。仰信とは、理性未だ發達せざる天性の人が、單直一向に救ひを仰がば、法爾の感應ありて功果の實を得。譬へば勞働者は食したる穀菜等を消化し人の血肉と成り得べきやは理學の智識なくとも、食する時は必ず血肉と化すべき如く、宗敎學の智識なくとも一向に仰信して一心念佛せば救靈の功あること必然なり。解信とは、如來の實在の眞理を理論的に解して、理性の承認する處に立つ信仰なり。證信とは一心念佛して靈性開發し、如來の靈應若しくば如來の相好光明等の種々の靈相を感見し、實驗證得によりて立つ信仰なり。

愛は、感情の信仰。愛は如來の靈應と感應融合を切望するの動機なり。宗敎の中心眞

髓は人の感情にあり。如來を信樂して、全く我有と想ふは、感情の奧なる愛の念なり。憶念して忘れ難きは愛あればなり。愛といふも肉の愛にあらず、高妙なる靈的戀愛なり。哲人プラトー常に天のあなたに憧憬せしと。故に神的戀愛をプラトーの戀と云ふ。また孔子が賢を賢として色に更へよとの意は、美色を愛するほど賢人を慕はゞ己も亦賢者の同侶とならんとの謂なり。釋迦キリストは言はずもがな、宗敎的天才の人は靈戀の情に富めるが如し。法華經に、一心に佛を見むと欲して戀念して止まざれば、佛其前に現じて爲に說法し玉ふと。靈應は聖者の愛なり。最と靈妙なる情の花にて、かぐはしき念なり。其愛念の深奧なる所に於て無上の靈應と交感することを得む。卽ち龍樹は信心華開きて佛を見ると云ひ、神人感應の神秘融合を、眞言には入我々入三密冥合と名け、禪家には八面玲瓏歡天喜地と云ひ、善導は身心融液不可思議と云ふ何れも生佛交感の神秘の消息を洩せしにぞ。中心之を嘉みせば何の日か之を忘れむ。衆生佛を憶念すれば佛も亦衆生を念じ玉ふ彼此の三業相捨離せず故に親緣と名づくと。善戀大士は

夜々抱レ佛眠　朝々還共起
纖毫不二相離一　如二身影一相似

語默同二居止一　起坐鎭相從
欲レ識二佛去所一　唯這語聲是

戀心僧都が、「ぬれば夢覺むればうつゝ束の間も忘れ難きは彌陀の面影」、滿腔の愛より溢れ出づる稱名に靈應美妙の聖容は呼び發さるれ、憶念內に充實する時は稱名の聲禁じ難し愛樂卽ち稱名と現はれ稱名卽ち愛樂を滿さしむ。

欲望。靈我實現の生活々動の欲望なり。如來の子たる自己を完成せんとの希求、一切と共に安寧を得んとの願望なり。精神に淨土を實現せんと欣念なり。欲望は意志動機の最も强き力なり。人は欲望を滿たしめん爲には忍耐勤勉してすゝむ。然して性格下劣の人は欲望する物もまた卑賤なり、肉慾動機唯々耽飮嗜美等の肉の快樂を目的として働き、又名譽財產權利等の我慾の爲には人格をも忘るゝ族あり。高尙なる理想と遠大の希望を抱ける人は人格高等なるは論を俟たず。靈的動機の欲望は願作佛心と願度衆生心となり。願作佛心とは自己の奧底なる法身の分たる靈性は發展せられ報身の心光に靈化せられ、己を圓滿に完成し現世を通じて永遠の淨土を實現せんとの欲望た

り。此欲望が聲を發して稱名と爲る。稱名卽ち彌陀の聖意なり。一心念佛し彌陀我にあれば此土も淨土なり。彌陀に在りて活動する作爲皆佛道修行也。靈的目的の前には災を轉じて福と化し苦も又變じて樂と感ず。艱難辛苦は自己を鍛錬するの器と爲し外界の迫害は靈性を研くの砥と爲す。願度衆生の望の前には緣なき衆生は度し難し惡言罵辱も彼を導くの緣とせむ況や好意を以て己に持するものをや。共に念佛して同生を求め、法喜禪悅の味を頒たむ。一切は悉く同胞なり。共に如來の聖意を體して終心を以て相親同情を以て相念ひ、諸の衆生と共に安寧を得むことを願ふを度生　欲望とす。

如來光明禮拜儀

如來光明禮拜儀

○晨朝の禮拜　三禮

南無阿彌陀佛

至心に歸命す

法身　報身　應身の聖き名に歸命し奉つる　三身卽一に在ます最と尊とき唯一の如來よ　如來の在さゞる處なきが故に　今現に此處に在ますことを信じて　一心に恭禮し奉つる　如來の威力と恩惠とに依て活き働らき在ることを得たる我は　我身と心との總てを捧げて仕へ奉らん　冀はくば一に光榮を現はすべき務を果す聖寵を垂れ給へ

如來光明歎德章

佛阿難に告たまはく　無量壽如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざる所なり　是故に無量壽如來を無量光佛　無邊光佛　無礙光佛　無對光佛　歓王光佛　清淨光佛　歡喜光佛　智慧光佛　不斷光佛　難思光佛　無稱光佛　超日月光佛と號し奉つる　其れ衆生有て斯光に遇ものは三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ぜむ　若三塗勤苦の處にありて此の光明を見たてまつらば皆休息を得て亦苦惱なく壽終の後皆解脫を蒙むらん　無量壽如來の光明顯赫にして十方を照耀す諸佛の國土に聞こえざることなし但だ我今其光明を稱するのみにあらず一切の諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆も咸く共に歎譽したまふこと亦また是の如し　若衆生ありて其光明の威神功德を聞て日夜に稱說して至心不斷ならば意の所願に隨ひて其國に生ずることを得て諸の菩薩聲聞大衆に共に歎譽して其功德を稱せられん　其然して後佛道を得る時に至りて普く十方の諸佛菩薩に其光明を歎ぜられんこと亦今の如くならむ佛の言はく我無量壽如來の光明威神の巍々殊妙なることを說かんに晝夜一劫すともなほ未だ盡すこと能はじ

至心に勸請す

三身即一に在ます如來よ　如來の眞應身は在さゞる處なきが故に今我身體は如來の靈應を安置すべき宮なりと信ず　諸の聖者の心宮に在しし如く常に我等が心殿こ在らせ給へ　今や己が身を獻げて至心に如來の靈應を勸請し奉つる靈應常住に我心殿に在まして

轉法輪を垂れ給へ

至心に讃禮す

南無無量壽佛

本有法身阿彌陀尊
本迹不二なる靈體の

南無無量光佛

十方三世一切の
獨尊統攝歸趣に在す

南無無邊光佛

如來無邊の光明は
徧ねく法界照しては

南無無礙光佛

如來無礙の光明は
靈德不思議の力にて

南無無對光佛

絕對無限の光明に
諸佛と等き覺位をえ

南佛歓王光佛

衆生無始の無明より
大歓王の光にて

南無清淨光佛

如來清淨光明に
迹を十劫に垂れ在し
無量壽王に歸命せん

法報應の本地なる
無量光を頂禮す

四大智慧の相にて
衆生の智見を明すなり

神聖正義恩寵の
衆生を解脫し自　とす

攝化せられし終局には
大般涅槃に證入す

惑と業苦の極なきも
一切の障り除こりぬ

我等が塵垢は滌がれて

六根常に清らけく
南無歡喜光佛
如來歡喜の光明に
禪悅法喜微妙なる
南無智慧光佛
如來智慧の光明に
佛の智見を開示して
南無不斷光佛
常恒不斷の光明に
作佛度生の願みもて
南無難思光佛
甚深難思の光明を
信心喚起の時いたり
南無無稱光佛
如來の慈光被むれば
神秘の靈感妙にして
南無超日月光佛
智悲の日月の照す下
聖意を己が意とし
光明攝取の文
如來の光明は遍ねく十方の世界を照らして念佛の衆生を攝取して
捨て玉はず

姿色も自づと潤ほるれ
我らが苦惱は安らぎて
喜樂極なく感ずなり
我等が無明は照されて
如來の眞理悟入るれ
我らが意志は靈化せば
聖意現はす身とはなる
至心不斷に念ずれば
心の曄曈とは成ぬべし
七覺心の華開らき
聖き心によみがへる
光の中に生活す身は
三業四威儀に行爲なり

念佛三昧　次に總回向の文
願はくば此功德を以て平等一切に施こし同じく菩提心を發して安樂國に往生せん

至心に發願す
智慧と慈悲とに在ます如來よ　教主世尊が六根常に清らかに光顏永しなへに麗はしく在しは內靈應に充給ひければなり　我らも完德の鑑たる世尊に倣ひて如何なる境遇にも姿色を換へざることを誓ひ奉つる　願はくば常に慈悲　歡喜　正義　安忍　剛毅　貞操　謙遜　眞實等の德を體し　外は怨親平等に同體大悲の愛を以て佗に待し得らるるやうに恩寵をたれ給へ

南無阿彌陀佛　三禮
○昏暮の禮拜
南無阿彌陀佛　三禮

至心に感謝す
大慈悲に在ます我らが如來よ　如來が與へ給へる明き光と清き濕氣と新らしき糧とに依て今日一日の務めを果したる恩德を感謝し奉つる　又如來の神聖と正義と恩寵との光明を被り今日聖意に契ふ務めを得たりしは全く聖寵の然らしむる處　深く其の恩德を感謝し奉つる

如來光明歎德章　晨朝と同之
至心に懺悔す
法身と智慧と解脫の三德を備へ給ふ如來に告白し奉つる　自身は

現に是れ罪惡の凡夫　心の至らざるよりして作す可らざゝ罪を造り　作すべき事を怠るの罪に陷いれり　是れ皆な自からの過なり實に大なる過りなることを感じて至心に懺悔し奉つる　今より後は悔い改め邪惡を捨て正善に就かんことを誓かひ奉つる　願くは恩寵に依て再び過に陷ること無く正しき人と爲さしめ給へ

如來十二光の讃頌　晨朝の如く

光明攝取の文　同

念佛三昧　同

總回向の文　同

至心に回向す

至善に在ます如來よ　我らは曾て心闇くして如來に在ますことを識らざりき　然るに如來の大悲招喚の聲に驚ろきて　至心に如來に歸依し奉れり　願くば我らを無限の光明の中に永遠の生命を與へ給へ　又願はくは上は如來の聖寵を被り下は一切の同胞に聖寵を頒つことを得しめよ　又我等を惡魔の誘惑よりさけて聖き道に向上むことを得しめよ　又聖意を世の同胞にしらしめて聖きみ光の中に共に安寧を得むことを希がひ奉つる

南無阿彌陀佛　三禮

如來光明禮拜儀　終

聖きみくに

聖き啓示を被むりて
清きみ天は朗らかに
雲に聳ゆる高樓は
瑠璃寶石の莊嚴の
七の寶の池見れば
金の沙はきらゝかに
寶の樹に玉の枝
みそのに遊ぶ樂みは
天つ乙女は雲を分け
ひゞける音の樂しさは
日々に六度の花の雨
きしの山吹宛がらに
三昧の筵に座を占て
烏瑟の綠は天にこい
金の相好妙にして
巍き威儀は嚴そかに
菩薩は妙なる法身に
如來を繞りし裝ひは
無爲泥洹の境には
大悲心に薫じてぞ

三摩耶の窓し開くれば
常世のみ國現はれぬ
金銀まに眞珠
照り輝やくこと窮みなく
八の功德の水みてり
清める面にぞ照り徹る
金の花は咲にほふ
無爲の都の春ながし
奏づるしらべ妙にして
身のをき處も覺ほえじ
金の庭にぞふりつもる
何の色ぞとまがふらめ
仰ぎ奉つれば彌陀尊
五山の毫光かゞやける
月のみ顏は圓かなり
萬の德は滿みてり
おの〳〵威德備はりて
雲の月をかこむ如と
長閉さ有無を離れにき
分身利物の極なけむ

念佛七覺支

(一) 擇法覺支

彌陀の身色紫金にて　圓光徹照したまへる
端正無比の相好を　聖名を通して念ほへよ
總の雜念亂想をば　排きて一向如來に
神を遷して念ずれば　便はち三昧成ずべし

(二) 精進覺支

聲々御名を稱へては　慈悲の光を仰ぐべし
身心彌陀を稱念し　勇猛に勵み勉めかし
金剛石も磨きなば　日光反映するが如と
三摩耶に神を凝しなば　彌陀の光は輝かん

(三) 喜覺支

偏へに佛を見まほしく　愛慕の情いと深く
身命惜まず念ずれば　即ち彌陀は現はれん
念々佛を念じなば　慈悲の光にもよふされ
靈きめぐみに融合うて　歡喜極なく覺ェゆれ

(四) 輕安覺支

御名に精神はさそはれて　心念ます〳〵至微に入り
三昧純熟する時は　清朗にして不思議なり
我等が業障ふかき身も　慈悲の聖意にとけあうて
身心あるを覺ほえで　定中安きを感ずなれ

(五) 定覺支

彌陀に心をうつせみの　もぬけ果たる聲きよく
三昧正受に入りぬれば　神氣融液不思議なり
慈悲のみ顏を覩まつれば　盡ての障礙も除こりぬ
入我我入の靈感に　聖き心によみがへる

(六) 捨覺支

絕對無限の光明の　中に安住するときは
此處に居ながら宛がらに　神は淨土に栖み遊ぶ
夜な〳〵佛と共に寢ね　朝な〳〵も共に起き
立居起臥添まして　須臾も離るゝことぞなき

(七) 念覺支

聖寵に染みし我心　秋の梢のたぐひかも
聖旨の光に靈化せば　光榮あらはす身とぞなる
聖旨を意とするときは　八億四千の念々も
みな佛心とふさはしく　佛子の德はそなはれる

十二光譜の譜

ハ調4/4

3 — 3 2	3 3 5 —	2 — 1 6	2 — 0
ナ ー ム ー	ムリヤウ ー	ジユウ ー ー	ブ ー ッ
2 2 2 —	2 2 1 2	3 3 1 2	2 — 0
ボンヌ ー ほんじやく	ホ ッ シ ン ふ に な ろ	ア ミ ダ ソ れ い た い	ン の
1 1 1 —	1 1 6 6	2 2 1 6	6 — 0
ア ト チ むれうー	十 ー コ ニ じゆわうに	タ レ マ ジ きめうせ	シ ん
	聖 き	み 國	

嬰ホ調 又はヘ調 4/4

7 1 7 6 3	1 1 7 6 6	7 1 7 6 7	3 — 0
き ー よ き き ー よ き	し め ー し た み そ ー ら は	か ふ ー む り ほ が ー ら か	て に
4 4 4 3	7 6 4 3	3 4 3 2 2	3 — 0
さ ま や の と こ よ の	ま ー ど し み ー く に	ひ ー く れ あ ら ー ほ れ	ば ぬ

ハ調4/4

七覺支の譜

1 1 1 3	2 2 2 1	2 2 3	5 — 0
み お や の す べ て っ	し ん じ き み だ る ろ	し こ ん に な こ こ ろ	て ば
6 6 6 5	1 1 6 6	5 5 5 3	5 — 0
え ん く わ う ひ ら き て	て つ し や う ひ た す ら	し た ま へ み ほ と け	る に
1 1 1 1	2 2 5 5	3 3 5 5	6 — 0
た ん じ や う を こ こ ろ を	む ひ の ー う つ し て	み す が に れ ん ず れ	ば
1 1 2 2	6 6 5 3	2 2 3 2	1 — 0
み な を ー ゞ な は ち	と し て い さ ん ま	お も ほ へ ば じ や う ゞ	よ し

一八

大正十三年三月十日印刷同月二十日發行
詩代年七冊壹圓貳拾錢　年十二冊貳圓
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區茗荷谷町三十七番地
印刷人　中川湛司
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京四九三四八番

ミオヤの光

弘誓の巻

聖經の友（あみだ經をよむ友どち）

常に心にかけてこの聖經をよむ人はこの御おしへにしたがひてかの微妙安樂の淨土に生せむことを欣求し、彌陀の本願に歸したてまつり後にはかの淨土にいたり、もろ〳〵の上善人と共に一處に會する友なれば聖經の友とは名づく。世のなかのあさましき淤れたる友にはあらで同じくこゝろの深き後のかぎりなき時をまで期しての友なれば、まことの友ぞかし。

こゝかしこ身はへだつともちぎりてしこゝろは聖の園にあそばむ。

この世の習ひ此かりの身は西東と千里の山百里の雲はへだつとも、この經をよむときに心は共にかの淨きみ國の御園にあそぶおもひまたたのしきに非ずや。

よむ聲に心もいつかさそはれて、たのしき園にめぐりあそばむ。

釋尊の說たまひし御言葉にみちびかれてかの極樂の七重の寶の樹のつらなりしはやしのうち、金の池のほとりなどに徐々として逍遙するの想ひ、豈たのしきにあらずや。

一

子をおもふ親のこゝろをしれかしと經のたよりにきくかうれしき。

子とは六のみちにさまよひしわれらなり、それを親とは淨き御國をかまへてまちわびたまふあみだほとけなり。經のたよりとは釋尊が此世に出まして彌陀の本願をきかしめてすゝめたまふ。若しわれらこれをしらずばまたむなしく三惡の火坑に沈むべかりしを、今この御法にあひたてまつりて淨土にまゐる身となりしことのうれしさ。

この經をよむたび毎におもふかな、ちぎりし友のふかきえにしを

この經の敎によりて信を定め、佛の本願に乘じて淨土をねがふ身はみな同じく蓮の上の友なれば、この經をよむに就てもその友をことに思はざるはなしとなり。

よそごとに聞やしつらんかの國をわが故鄕としらぬむかしは。

この經にときたまひし微妙安樂のさまを聞きながらもこゝろなきものには、よそごとに聞くならん。佛の御意を領解しぬる上は阿彌陀佛を慈悲の父とし、極樂をもて我本國といふべけれ。されどまだしらぬむかしはよそのことにきゝやしぬらんと。

かざりつゝたれをまつとやおもふらん、親のこゝろを子はしらずして。

あみだ佛は法藏因位のむかしより平等一子のやるせなき御慈悲より、十方淨土にすぐれたる極樂世界を莊嚴してまちわびたまふ、ひとへに我らがためなれども、われらまよい子はさともしらずしてむなしく六のちまたにさまよふなり。

ながき夜のねむりもやがてさめぬべし、あかつきごとによむ經の音に。

ながき夜とは無明の中にうちねむりて無始よりこのかたさまよひしも、あかつきのねざめのごとくに、まよひのねふりもやがてこの經のおしへによりて淨土に生れゆきて、大覺朗然としてさとりのねざめとなるべきなり。

法の緒を心のたまにつらぬきし、はちのすの友はこひしかりけり。

ずゝのたまに緒のとほしたるごとく、このみだの本願の法のいとを衆生信心のあなに通しておなじく一蓮の身となるべき友は、かりそめのこの世ばかりの友とは

二